

第69回 身心変容技法研究会

2018/7/9

(於:上智大学大阪サテライトキャンパス内グリーンケア研究所)

ミュージック・サナトロジーとケアと身心変容

里村 生英

1. はじめに

1-1. 「音楽経験」と「スピリチュアル」 —ミュージック・サナトロジー研究の背景—

*「音楽経験」

- 音・ひびきそのもの、また、その響きのスペースに実在する、静寂 (stillness, silence)、気の流れ、気配、雰囲気、振動・エネルギー、といった“微細な”レベルでの感受・認識を含む、いわば、「ひびきの時間・空間の体験」
- 人間の一つの基本的存在様式
- ≠ 音楽作品の鑑賞体験

個人的背景①:「音楽教育学概論」

- なぜ、学校に音楽/音楽経験は必要なのか。
- なぜ、子ども(人間)に音楽・音楽経験が要るのか。
- 子ども(人間)の生活経験と学校音楽は、いかなる関係にあるべきなのか。

=人間と音楽との関係についての根源的な問い

個人的背景②：個人的音楽経験から

- ただただ音を聴きながらプラクティスするという行為と時間
- 自分を取り巻く静けさ・気配・音に対する注意深さ/感性が磨かれる
- 自分の存在基盤・自己肯定感を保つ



世界平和記念聖堂内(正面)
* 後ろにパイプオルガンが設置されている

個人的背景②：個人的音楽経験から

- ただただ音を聴きながらプラクティスする
- 自分を取り巻く静けさ・気配・音に対する注意深さ/感性が磨かれる
- 自分の存在基盤・自己肯定感を保つ
- “ただ存在しているだけ”の自分になる

* 高度に集中して自分の内面の深いところに入っていく

* 眼には見えない気配、エネルギーのようなもの、何か畏怖の念を感じさせるものを感知することに招かれる

個人的背景③：教員経験から

- 「美的経験としての幅を広げるための音楽経験」
- “音・ひびきそれ自体の探究”をメインに据えた、初等教育プログラム(幼稚園・保育所、小学校)における音楽経験の設計及び環境の構成研究

(コダーイ、オルフ、シュタイナー、ダルクローズ等の音楽教育論や方法論の検討に基づいて)

個人的背景③：教員経験から

⇔（連関）

- 学級崩壊、いじめ、不登校、子どもの生活様式の多様化といった現象
- ↑「関係性の喪失」
- 「心・内面のケア」／「関係性の回復」

個人的背景④：
教員をしながらのスピリチュアルな体験

- 学校礼拝での奏楽
- 感覚体そのもののからだで、音・ひびき・音楽を受け止めていく(吸収していく)乳児・幼児期の子どもを対象とした、音楽経験・音楽することのあり方を、よりリアルに問われる

個人的背景④： 教員をしながらのスピリチュアルな体験

- * 親友の死
- * 阪神大震災
- * 地下鉄日比谷線事故との遭遇



- 自分の存在そのものが脅かされるような心地
- 自分の芯となっているものを、もっと見極めておかなければ立ってられないような危機感

個人的背景⑤

「スピリチュアリティ／スピリチュアルケア」といわれるものとの出逢いと模索

⇒音楽することの“あり方”に対する心境の変化

- △コンサートや人の前で自分の技能を披露するための音楽のあり方
- △エンターテイメントや気晴らしのための音楽のあり方
- ◎何かもっと人間存在の根源に関わることのできる音楽のあり方、内面の深いところに着いて(響いて)、からだ全体・存在そのものを調和・安寧へと導いてくれるような音楽のあり方

個人的背景⑤

「スピリチュアリティ／スピリチュアルケア」といわれるものとの出逢いと模索

⇒アメリカの神学者H.ナーウェン

- 人間の根源的状态(傷つきやすさ・弱さ・痛み)の様々な様相、あるいは関係性の喪失を描く
- そこに、大いなる存在(神)は響き合っておられる、共にいてくださる
- 祈りに応答する慈愛でもって包み、変化・変容(癒し)をもたらしてくださる

個人的背景⑤

「スピリチュアリティ／スピリチュアルケア」といわれるものとの出逢いと模索

- 静まり、祈り、瞑想、ritual(儀式)を助けるものとして、音・ひびきをそぐわせる方法
- =スピリチュアルな働きが促進されるような音・ひびきの“質”を創り出すことのできるような音楽のあり方、

を探究する道の模索

*「美的経験としての音楽経験」から「スピリチュアルな経験としての音楽経験」へ

* アメリカ ボストン大学 School of Theology へ

個人的背景のまとめとして 「ミュージック・サナトロジー」という運動体との結びつき

- 「音楽経験」と「スピリチュアル」と「ケア（関係性と変容）」をつなぐものの探求が常にあった



初めからミュージック・サナトロジーに出会って研究を始めたわけではない。上記三つをつなぐものであれば材料（方法論）は何でもよかった。しかし探し求めた結果、他に相当するものはなかった。言い換えれば、ミュージック・サナトロジーをそういうものとして意味づけた。

- 「スピリチュアル/スピリチュアリティ」について

【用語法】「スピリチュアル・スピリチュアリティ」

- 「**超越性**」: 神、仏あるいは例という名称を使わない形であるが、「神秘的存在」、「人間を越えた存在」、「大いなるもの」、「聖なるもの」といった名称で言い表わされる、人間(私)と垂直関係を創っている存在に対する関心や希求。また「自然の威力、偉大さ」への感動、「大いなるいのち」への畏怖、芸術体験における実感や感受。「聖なるものとのつながり」とも言える。

つづき

- 「内面性」・「内面へと向かう道」: 生きる意味、存在の土台、あるいは真実の自己を求めて、沈黙や瞑想を通して、意図的に日常とは異なる次元(自らの深み、内的静寂、純粹さ)へと鎮静する性向。特定の宗教的な教義、習慣、やり方に関与しない形が含まれる。

つづき

- 「**実存性**」: 人生の意味、生きる目的、存在の土台、罪の意識、死後のいのちへの希望等、各人がこの世でその生を生きる(実存する)ゆえにその人が背負う切実な問題・苦悩を実感・自覚する、あるいはそれらに覚醒する性向。「実存的」とは、生きる意味や目的を自覚的に問いつつ、現実に存在する人間の主体的な有り様の形容。

つづき

- 「**宗教性**」: 従来の宗教が扱ってきた事柄としての、神・仏の力へ心が向かう性向、信仰心。
- 「**魂(に関する事柄)**」: 上記「宗教性」の側面に属するが、ここでは、いち個人内の、身体的、精神的、情緒的と区別する形で、人間が持つ、この世的な事柄を超えて、より絶対的・究極的な存在や意味を求める局面を示す意味で使われる。
- 「**見えざるものへの鋭く豊かな感性**」: 人間が聖なるもの・大いなるものにかかれていて、それをキャッチするアンテナが精妙に働いているという意味。上記「魂に関する事柄」及び「宗教性」と重なるが、ひびきと静寂のうちに聖なるものを見て取るミュージック・サナトロジーの世界では、よりはっきりとした意味合いを持つ側面として認識され、使用される。

つづき

- 「**全体的/全体性**」: 肉体と魂とスピリットの「ひとまとまりの全体性」という文脈において使われることがある。「ホリスティック (holistic)」という言葉で補足説明される場合もある。
- 「**全人的**」: 上記とほぼ同じ。ひとを一人の人間及び人格として、肉体、マインド、魂、スピリットのひとまとまりの存在として捉えるという視点に立つ。
- 「**同調的/統合的**」: その場のものや人の関係性が共感的・一体的になっていく力動が働いていて、なおかつ、それが、調和、和合、安寧、癒しと言った言葉で言い表わされる統合的状态の方向へ向かうという動態を言い当てている。

1-2. 本発表の目的

- ミュージック・サナトロジー (music-thanatology) がいかなる意味で、「ケア (スピリチュアルケア)」であるのか、実践の様相ならびに方法論 (= 創設者シュローダー=シーカーの思想) を通して検討すると共に、
- ミュージック・サナトロジー実践において「心身変容」とはどういうことをいうのか、ミュージック・サナトロジーのケア的意味をふまえて、一つのケース検討を試みる。

Contents: 構成

1. はじめに
2. ミュージック・サナトロジーについてー臨床実践運動の概要ー
3. ケア方法論としてのミュージック・サナトロジーのオリジナリティ
4. ケアの音楽的なやり方ー「プリスクリプティヴ・ミュージック」という在り方に焦点を当ててー
5. おわりに: ミュージック・サナトロジーと身心変容

2. ミュージック・サナトロジー (music-thanatology)について



Photo: Lynn Johnson
Reprinted from <http://chaliceofrepose.org/first-vigil/>

“臨床実践運動”の概要



<http://chaliceofrepose.org/wp/images/ch04web.jpg>

◆対象者:

終末期・臨死期の患者とその家族

◆実践様態:

- ・ベッドサイドで
- ・(歌)声とハープの音・響きを活用して、
- ・その患者のその時の状態に注意深く応答して、ひびき・音楽(プリスクリップティヴ・ミュージック)を紡ぎだして提供する

概要(つづき)

◆ 身体(肉体)と魂の“両方”の(=スピリチュアルな)ニーズ
に取り組む臨床実践、および、そのやり方・方法論

◆ 焦点(実践目標):

最期の時に一緒に居て、
患者が人生の満了(=「死」)へと進むのを助ける
(この世界から未知なる次の世界へとスムーズに移行
するのを損なわせる何ものからも解
き放たれるように 助け、支える)



◆ 実践への反応・評価:

患者が死に逝く在り方にスピリチュアルな局面(尊厳、恩寵、美の
感覚)を添える (Schroeder-Sheker, 2001; Cox & Roberts, 2007; Hollis, 2010; 里村,2016)

概要(つづき)

▪ 1974年～

現代のホスピス運動がアメリカ合衆国でエンドオブライフ・ケアに影響を与え始めた時期



創設者&プロジェクト主導者
Therese Schroeder-Sheker



▪ 現在 アメリカでは、
緩和ケア、
エンドオブライフ・ケア領域の
一つの専門モダリティ(modality)
として認知を得ている。



<http://www.freewebs.com/harpsong/websiteHarpatHospBed.jpg>



<http://www.freewebs.com/harpsong/hermansen1.jpg>



<http://www.freewebs.com/harpsong/CraigHolye.jpg>

概要(つづき)

◆ 独自のな点

・私たち自身の「mortality:死すべき運命」を認めるといった実存的な問題に全面的に関わる方法論である。

・死に逝く道行き(プロセス)に寄り添い、支えるために、歌声とハープの音・響き(と沈黙)が“応答的に”使われる(⇒後述「プリスクリプティヴ・ミュージック」で説明予定)。

・11世紀フランス、クリュニー修道院の看取りの慣わし・儀式から、精神的・歴史的基盤を与えられている(⇒詳細検討については里村(2009, 2016b, 2017b)を参照)。

・「観想修練の臨床適用 (contemplative practice with clinical application) 」(Schroeder-Sheker, 1994, 89; 1998, 30; 2001, 15, 59; 2005a, 57) である(⇒詳細検討については、里村(2011, 2017a, 2017b)を参照)。

You Tube

“Transitus” and The Work of Music Thanatology
Compressed with Therese Schroeder-Sheker

- <https://www.youtube.com/watch?v=DgQHgn0tboY>(3'11"



「ベッドサイドを訪問して、ハープと
歌声を使いながら、その患者に注意
深く応答するやり方で、ひびき・音楽
を提供する」

⇒何ゆえ「ケアする」ことなのか。
創り出されるひびき・音楽の時間・
空間(スペース)のなかで何が起こっ
ているのか。

3. ケア方法論としてのミュージック・サナトロジーのオリジナリティ

中世修道院医務室の癒しの術への着目



肉体のケア・魂の癒し(キユア)：
Care for the Body,
Cure for the Soul

11世紀クリュニー修道院



218. ベネディクトゥスの修道制では死者への聖務は重要であった。1437年、ディジョン、ルネ王の聖務日課書の写本挿絵（大英図書館、ロンドン、Ms. Egerton 1070）

その発端からCORP*注のヴィジョンは、生活の中での観想的修練 (a contemplative practice) を臨床実践に適用するということにありました。

私たちの目標は、「プリスクリプティヴ・ミュージック (prescriptive music)」を届けることを通して、死に逝かんとしている人の身体的またスピリチュアルなニーズに、愛情をこめて応答することです。

*注... ミュージック・サナトロジー実践と実践者養成教育を管理・運営する組織 (the Chalice of Repose Project, 以下CORPと記す)。ミュージック・サナトロジーの創設者：シュローダー＝シーカーがディレクターを務めている

このような働きに与えられた用語が「ミュージック・サナトロジー」です。

その実践者はこの働きのための特有な技能を持った“音楽家－臨床家”で、「ミュージック・サナトロジスト」と呼ばれます。

ミュージック・サナトロジストは、声とハープを活用して、死に逝かんとしている人のベッドサイドで、その人に合わせて音・音楽を詠え、ライブで届けます。

このような、いわば音のメディスンとでも言うべき医療術的なひびき・音楽が提供される時間を、「ヴィジル(vigil: 油断のない、注意を払っている、の意)」と称しています。

(Schroeder-Sheker, 2001, 15)

ミュージック・サナトロジーというケア 様式の特徴的な点（CORPの創意 点）

- ①ケアする側の日常生活における観想的修練の実行を、ケアすることのベースにしているという点
- ②死に逝く患者の身体的及びスピリチュアルなニーズに取り組むということ、またそのような全人格的ケアに取り組むために、その人の傍らで声とハーブを用いて、その人の容態に合わせて音・音楽（プリスクリプティヴ・ミュージック）をその場で創り出すというやり方を採るという点
- ③ミュージック・サナトロジーにおけるケアの意図・方向性は、目の前の患者との関係性を構築し、その人と共にあろうとすることに置かれているという点

ミュージック・サナトロジーのケア様式 としての特徴点・創意点

◆ミュージック・サナトロジーは、

①死に逝かんとしている人の傍らで、ハープと歌声を用い、その人に合わせて音・音楽を詠え、その場で提供するという、ケアの音楽的なやり方

②「ミュージック・ヴィジル」という形態で、患者の全人格的なニーズに応答することを目標とし、実際的なケアの方向性を患者の痛みや苦しみと共にあることに置いている

③畏敬の念と自らの在り方や考え方に対する内省的態度を培っていく観想的修練が実践の土台となっている

4. ケアの音楽的なやり方
ー「プリスクリプティヴ・ミュージック」
という在り方に焦点を当ててー

4-1. 「プリスクリプティヴ・ミュージック」という在り方 ーひびき・音楽を医療術的・ケア的に使用するということー

私たち(CORP)が目標とするのは一つです。すなわち、プリスクリプティヴ・ミュージックの提供を通して、死に逝かんとしている人の肉体的そしてスピリチュアルなニーズに愛情深く応答することです。...略...

その音楽は、声とハープで、ひとりの死に逝かんとしているひとのベッドサイドで、生(ライヴ)で届けられます。それは個別的で、その人のために誂えられます。

そして、音のメディスンとでもいうべきこの医療術的な響き・音楽の提供(のやり方)は、「ヴィジル」(vigil; ラテン語の「油断のない」が原意)と命名されています。

(Schroeder-Sheker, 2001, 15)

「ケアの音楽的なやり方」として音楽(=プリスク립ティヴ・ミュージック)を捉えるときの重要な前提条件

- ①ミュージック・ヴィジルで提供されるひびき・音楽は、死に逝くという状況にある個々の患者の身体的またスピリチュアルなニーズに応じることに焦点を合わせている
- ②そのひびき・音楽は、生(ライブ)で、そして、ハープと歌声で提供される
- ③ハープと歌声によるそのひびき・音楽は、死に逝かんとしているその人のニーズに「今ここで」応じるために、個別的に、その人のためだけに詠えられる

(つづき)

①②③...「プリスクリプティヴ・ミュージック」とは、

ケア対象者となる人のニーズに応じて、その人の傍らでその場で音を調合し、その人のために音・音楽を詠らえる、このような、いわばケア対象者との関係において生み出された音・ひびき、またその生み出す一回一回のわざ(医療的技法:メディスン)そのもの

対象者のニーズに応じて響き・音楽を 一回一回生み出すというわざ

ミュージック・サナトロジストは、...略...

- ・患者の脈拍、
- ・心拍数、
- ・呼吸のパターンと深さ、
- ・体温、
- ・表情や四肢の緊張状態等を注意深く観察する。

そして、観察した事柄に鑑みて、奏でる音のトーン、音量、テンポ、曲調を選択、決定する。

対象者のニーズに応じて響き・音楽を 一回一回生み出すというわざ(つづき)

沈黙の時間を少しとり、患者の呼気・吸気のサイクルに呼応して音・音楽を紡ぎだしていく。

例えば、患者の呼気・吸気に、音楽の一つのフレーズの長さや輪郭を一致させる。

ダイナミクス(音量)を変化させて、患者の落ち着かない様子から落ち着いた様子への変化、あるいは息をすることに労力する様子から和らいだ状態への変化に付き添う。

また、手足の動きや呼吸のリズムに、曲のリズムを同期させる。

反対にリズムのない、無拍子の音楽によって患者の内面の動きや外に顕れている動きをサポートする等である。

対象者のニーズに応じて響き・音楽 を 一回一回生み出すというわざ(つづ き)

音楽提供が進むにつれて、

- ・患者の脈拍、・呼吸パターンとその質、
- ・心拍数、・体温、・皮膚分泌物等

が穏やかに、また時には激しく変動する。

ミュージック・サナトロジストはそれをフィードバックしながら、絶えず患者に注意を向け、その状況に応じた音・音楽のアセスメントを続けながら例示したようなやり方で音・音楽の提供を進めていく。(Schroeder-Sheker, 2001, 11, 57;

2005a, 57; Hollis, 2010, 35-36, 下線は引用者)

ミュージック・サナトロジスト(ケアする側)がしていること

- 常に患者に注意を向ける
- その時々 of 患者の反応に付き添う
= 患者その人の全体的な様子や雰囲気、呼吸の様子、手足の動き等、知覚できる手がかり(徴候)のダイナミズム、リズム、トーンを観取 ⇔ 音・響きを介して「呼応」、「一致」、「付き添う」、「同期」(引用下線分)
- 微細な兆候を観取する特殊な注意の働き、応答や同期等によって関係性を繋ぎ、維持する努力、そして、穏やかさ、落ち着き、和らぎ、静かさといった調和・平安さの尊重
- ケア対象者との関係、それも生命に関する最も根源的な指標であるバイタルサインをはじめとした身体現象との関係性の中に調和・平安を見出していこうとする

ケアの音楽的なやり方(=プリスクリプティヴ・ミュージックというやり方・わざ)の要点

- ケア対象者(死に逝かんとしている人)の傍らに居て、その人のニーズに「応答」する
- 終始患者の状態に注意を払い、合わせられるポイント(リズム、トーン、ダイナミクス等)を探して、それを音に反映させる

= 身体感覚を含めた認識論的位相のやりとりを音・音楽に変換していく

4-2. プリスク립ティブ・ミュージックを 創り出すことのケア的意味

◆「症状緩和」に取り組む方法論（先行実験的研究より：
Freeman et.al, 2006; Cox et al, 2010; Ganzini et. al, 2015）

- 身体的（神経症的）症状に付き添う
 - 患者の不安興奮、不眠、呼吸困難を和らげる、
鎮痛剤使用の減少
- 感情・情緒面への貢献
 - 落ち着き、寛ぎ、慰めを覚える

❖ 患者のからだところどころのコンディションを、調和的に整えていくことに寄与するケア方法論

プリスク립ティヴ・ミュージック提供 のプロセスにおいて起こってくる「内面的 変化」

ベッドサイドで演奏されるライブ音楽（プリスク립ティヴ・ミュージック）の提供と共に、心拍数や呼吸のパターンが変化するにつれて、ゆっくりと、徐々に、すべてがシフトしていきます。[痛みや苦悩から来る緊張がほどけて]深まりが起こってくるのです。するとすぐに、多くのエネルギーが再び、死に逝かんとしている人に得られることとなります。

このことは、あらゆる内面的なワークーa死に逝くこと
それ自体、和解、ゆるし、受容すること、思いやり、手放すこと、別れを告げることーに死に逝かんとしている人が取り掛かることを可能にさせます。（Schroeder-Sheker, 2005a, 57, a下線は引用者）

プリスクリプティヴ・ミュージックの 「働き方」

より堅実な言い方をするとすれば、プリスクリプティヴ・ミュージックは抗生物質や抗ウイルス剤のように、他者を襲ったり攻撃したりするようには働きません。

むしろそれは、...略...患者、実践者（ミュージック・サナトロジスト）、そして第三の未知なる神秘的存在（the mysterious presence of the Third, the Unknown）、これら三者の間の関係を静かにつなぎ、あるいはつながりを回復させ、さらにはそのつながりを涵養し強めるように働きます。

私たちは常に第三の未知なる存在を心の中に思い描いています。ヴィジルは沈黙の祈りと共に始めます。b神聖さは、人間であることそして人生において、極めて重大な要素だからです。（Schroder-Sheker, 2009b, 1-2, b下線は引用者）

経験(意味)の再構成⇒人生全体の 再統合

- プリスキプティブ・ミュージックは、人の苦しみや痛みを取り去るものではありません。しかしながらそれは、その人が内奥(内面)(ever greater depth, interiority)へと向かう動きに必要な、親密で寛げる状態を創り、促進し、維持し、保護します。
- 内奥とは言葉によらない省察が始まる場所です。言葉の操作を止めて静かに省察を始めると、外からの情報、社会の声や評価すべてが自分の中で静まっていきます。
- すると、自分の内奥からの声、本当の自分の声が聞こえ始め、解放されていきます。意味の発見と共に、私たちの日常の出来事は「経験」に変わります。...略...
- 私たちは往々にして、日々の出来事(地震、解雇、窃盗、飲酒運転者等)の犠牲になっているように感じます。
- しかし、しばし留まり洞察することによって、意味を発見し、出来事が経験へと変わることは、本当に人生観が変わります。
- それはより包括的な視点からくるヒーリングです。意味が見出された経験はその人の人生をより完全にそしてより豊かにするものとして、人生全体に統合されていきます。...略... (Schroder-Sheker, 2009a, 6-7)

・プリスクリプティヴ・ミュージックは内奥(内なる静寂の場所)とつながることを助け、より包括的な視点から「意味を発見」することの可能性を開く

・その意味の発見は、これまで漠としていたあるいは否定的な意味を持つものでしかなかった「日常の出来事」を、「経験」へと変え、人生をより豊かにする要素としてその人の人生全体に統合されていく

❖プリスクリプティヴ・ミュージックは、死に直面している人が内奥とつながり、自身のこれまでの人生、また「死に逝く」という時期に何らかの意味(価値)を見出し、死に向かう精神的な準備をすること、またその人の人生全体がより完全なものへと成熟(変容)していくこと、これらを助け支える

4-3. プリスク립ティヴ・ミュージックを 創り出すことのケア的意味(まとめ)

①身体と心の状態を調和的な方向に整えていくことに寄与するという意味において、医学的・療法的なケア方法論である。

②しかし死に逝かんとしている人が内面的ワークに向かい、他者とつながり、聖なるものとつながる機会を提供するという意味においては、つながり・関係性を援助・サポートするケア方法論である。

③加えて、意識が内奥へと向かい、そこでの省察と意味の発見を助けるという意味においては内面性沈潜のサポート、言ってみればスピリチュアルケアの方法論である。

そして①②③を総合して見ると、死に対する精神的準備をし、人生全体をより実り豊かなものに再統合していくことを傍で支える「**全体的統合**」のための方法論である。

おわりに： ミュージック・サナトロジーと身心変容

❖ミュージック・サナトロジーの地平から考える「心身変容」...

- ・その人の人生の「全体的再統合」
(=「死」に向かう精神的な準備をする)
- ・あるいは「経験の再構成」・「意味の再構成」

創始者シュローダー＝シーカーのナラティブ ー最初のミュージック・ヴィジルー

- A) 高齢者施設での居住者の生活と死に逝く姿に触れるなかでの大きな苦痛と混乱の経験ー突き付けられた問い:(死に逝く人を)ケアをするということはどういうことか
- B) 一人の牧師との出会いーこれまでとは異なるケアのあり方とケアへの取り組み方への示唆:スピリチュアルな(内面性、見えないものへの感性を深めるという)視点からの助言
- C) 肺気腫で臨死の居住男性との出会いーこれまでとは異なるケアのあり方の萌芽:関係性を築き、専心し、歌声を介して共に居る
- D) スピリチュアルなもの(神聖さ、輝きのち)に触れた体験を通しての「死に逝く」の意味の理解ー整合的な語り:死に逝く人をケアするとはどういうことか、死に逝く人をケアすることの意味は何かの再統合

文献(抜粋)

- Schroeder-Sheker, T. 1992. Musical-Sacramental-Midwifery: the Use of Music in Death and Dying. In *Music, Medicine, and Miracles*, ed. Don Campbell, 18-35. Wheaton, IL: Quest Books.
- Schroeder-Sheker, T. 1993. Preface. In *A Medieval Latin Death Ritual: The Monastic Customaries of Bernard and Ulrich of Cluny*, by Frederick S. Paxton, xi-xiii. Missoula, MT: St. Dunstan's Press.
- Schroeder-Sheker, T. 1994. Music for the Dying: A Personal Account of the New Field of Music-Thanatology – History, Theories, and Clinical Narratives. *Journal of Holistic Nursing*, 12 (1): 83-99.
- Schroeder-Sheker, T. 1998. Shaping a Sanctuary with Sound: Music-Thanatology and the Care of the Dying. *Pastoral Music*, 22 (3): 26-41.
- Schroeder-Sheker, T. 2001. *Transitus: A Blessed Death in the Modern World*. Missoula, MT: St. Dunstan's Press.
- Schroeder-Sheker, T. 2002. The Last Note: Can Music Carry the Soul into a New Life? *Parabola* (summer): 35-38.

文献(抜粋・つづき)

- Schroeder-Sheker, T. 2005a. Prescriptive Music: Sounding Our Transitions. *Explore: The Journal of Science and Healing*, 1 (1): 57-58.
- Schroeder-Sheker, T. 2005b. Contemplative Musicianship; Liminality & Music as an Organizing Force. In the Chalice of Repose Certificate in Contemplative Musicianship Distance Learning Program Online Lecture Material, CCM2 Module 1, posted June 13, 2005.
- Schroeder-Sheker, T. 2005c. Spirituality of the Voice and Pitch; Metanoia. In the Chalice of Repose Certificate in Contemplative Musicianship Distance Learning Program Online Lecture Material, CCM2 Module 2, posted July 18, 2005.
- Cox, H., & Roberts, P. (2007). From music into silence: an exploration of music-thanatology vigils at end of life. *Spirituality and Health International*, 8, 80-91.
- Cox, H., Roberts, P., McGill D, Carr, J., and Kelly, M. (2010). The Use of Prescriptively Played Harp Music in the Special Care Nursery. Final Report, The institute of Music In Medicine, Australia.

文献(抜粋・つづき)

- Freeman, L., Caserta, M., Lund, D., Rossa, S., Dowdy, A., and Partenheimer, A. (2006). Music thanatology: Prescriptive harp music as palliative care for the dying patient. *American Journal of Hospice & Palliative Medicine*. Vol.23, No.2, March/April, 100-104.
- Ganzini, L., Rakoski, A., Cohn, S., and Mularski, R. A. (2015). Family members' view on the benefits of harp music vigils for terminally-ill or dying loved ones. *Palliative and Supportive Care*. 1-4.
- Hollis, J. L. 2010. *Music at the End of Life: Easing the Pain and Preparing the Passage*. Santa Barbara, CA: Praeger. (ホリス『エンドオブライフ期の音楽ー痛みを和らげ、旅立ちの準備に寄り添う』里村生英訳, ふくろう出版, 2014)
- Nouwen, H.J.M. 1972. *The Wounded Healer: Ministry in Contemporary Society*. New York, NY: Doubleday. (ヌーウエン『傷ついた癒し人ー苦悩する現代社会と牧会者』西垣ニー・岸本和世訳, 日本基督教団出版局, 1981)

文献(抜粋・つづき)

- Paxton, F. 1990. Christianizing Death. New York, NY: Cornell University Press.
- Paxton, F. 1993. A Medieval Latin Death Ritual: The Monastic Customaries of Bernard and Ulrich of Cluny, Studies in Music-Thematology 1. Missoula, MT: St. Dunstan's Press.
- Paxton, F. 2012. Listening to the Monks of Cluny. In C. Chazelle, S. Doubleday, F. Lifshitz, & A.M. Remensnyder (Eds.), Why the Middle Ages Matter: Medieval Light on Modern Injustice, 41-53. New York, NY: Routledge.
- Paxton, F. and Cochelin, I. 2013. The Death Ritual at Cluny in the Central Middle Ages. Turnhout, Belgium: Brepols.
- 安藤治. 2007.「現代のスピリチュアリティ—その定義を巡って—」安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学』, 11-33. せせらぎ出版.
- デーケン, アルフォンス. 2011.『新版 死とどう向き合うか』NHK出版.

文献(抜粋・つづき)

- 古田暁. 2000.『聖ベネディクトの戒律』すえもりブックス. 平山正実. 2014.『死と向き合って生きるーキリスト教と死生学』教文館.
- 広川良典. 1997.『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢化社会ー』筑摩書房.
- 広川良典. 2000.『ケア学ー越境するケアへー』医学書院.
- 鎌田東二. 1995.『宗教と霊性』角川書店.
- 鎌田東二編. 2014.『講座スピリチュアルケア学1スピリチュアルケア』ビイング・ネット・プレス.
- 窪寺俊之. 2000.『スピリチュアルケア入門』三輪書店.
- 窪寺俊之. 2004.『スピリチュアルケア学序説』三輪書店.
- 窪寺俊之. 2008.『スピリチュアルケア概説』三輪書店.
- 窪寺俊之監修. 2012.『スピリチュアルケアの根底にあるものー自分が癒され、生かされるケア』遊戯社.

文献(抜粋・つづき)

- 中川吉晴. 2005.『ホリスティック臨床教育学—教育・心理療法・スピリチュアリティ—』せせらぎ出版.
- 中川吉晴. 2015.「ホリスティック教育とスピリチュアリティ」鎌田東二編『スピリチュアリティと教育』, 93-120.ビイング・ネット・プレス.
- 西平直. 2005.「からだ・いのち・無のはたらき—無の思想の地平から」『緩和ケア』15 (5): 552-555.
- 西平直. 2007.「スピリチュアリティ再考—ルビとしての『スピリチュアリティ』—」安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学—心の時代の学問を求めて—』, 71-90. せせらぎ出版.
- 西平直. 2013.「ケアと云わないケアの思想—ケア論が私たちに突き付けた問い—」西平直編著『講座ケア3 ケアと人間—心理・教育・宗教—』, 1-23. ミネルヴァ書房.
- 里村生英. 2006.「霊性体験の深まりへのひびき・賛美・沈黙(静寂)の貢献について—All Saints Parish, BrooklineでのCeltic Holy Eucharist体験を通して—」『日本賛美歌学会紀要』2: 26-48.

文献(つづき)

- 里村生英. 2009.「音楽死生学(ミュージック・サナトロジー)実践方法論の精神的基盤－11世紀クリュニー修道院における死の看取りの儀式による肉体のケア・魂のキューア－」『エリザベト音楽大学研究紀要』29: 31-41.
- 里村生英. 2011.「終末期ケアにおける臨床音楽家のあり方について－音楽死生学実践家(ミュージック・サナトロジスト)養成プログラムにおける contemplative musicianshipを通して－」『エリザベト音楽大学研究紀要』31: 23-36.
- 里村生英. 2012.「終末期がん患者が音・音楽と関わることのスピリチュアルな意味についての－考察－音楽死生学(ミュージック・サナトロジー)の方法論を適用した生の音楽提供の事例を通して－」『エリザベト音楽大学研究紀要』32: 1-13.
- 里村生英. 2016a.「ミュージック・サナトロジーの地平からみたスピリチュアルケアの様相」『トランスパーソナル心理学／精神医学』15 (1): 43-61.
- 里村生英. 2016b.「11世紀クリュニー修道院の看取りの慣わしにみる死に逝く人へのケア－ミュージック・サナトロジーに影響を与えたケアの精神性を中心として－」『臨床死生学』21 (1): 58-67.
- 里村生英. 2017a.「ミュージック・サナトロジーの方法論－関係性と変容のアートとして－」『ホリスティック教育研究』20: 21-35.
- 里村生英. 2017b.「音楽経験を通じたスピリチュアルケア－ミュージック・サナトロジーの検討を通して－」2017(平成29)年9月、京都大学教育学研究科博士後期課程 学位申請論文

文献(抜粋・つづき//)

- 関口武彦. 2005.『クリユニー修道制の研究』南窓社.
- 島菌進. 1996.『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』東京堂出版.
- 島菌進. 2007.『スピリチュアリティの興隆ー新霊性文化とその周辺』岩波書店.
- 島菌進. 2012.『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂.
- 島菌進. 2014.「スピリチュアルケアと宗教」鎌田東二編『講座スピリチュアルケア学1スピリチュアルケア』, 69-90. ビイニング・ネット・プレス.
- 高木慶子. 2014.「現場から見たパストラルケアとスピリチュアルケア、グリーンケア」鎌田東二編『講座スピリチュアル学1スピリチュアルケア』, 42-68. ビイニング・ネット・プレス.
- ターナー, ヴィクター・W. 1996.『儀礼の過程』新装版, 富倉光雄訳, 新思索社.
- 若尾裕. 1997.「この世で最後に聴く音楽」『春秋』385: 21-24. 春秋社.
- 若尾裕. 2000.『奏でることの力』春秋社.

ご清聴ありがとうございました。

